伊勢のごせんぐう

編集発行・伊勢御遷宮委員会
伊勢市岩渕1-7-17(伊勢商工会議所内)
電話0596-25-5215
「伊勢 神話への旅」ホームページ
http://www.isesengu.jp

知っておきたい、伊勢のこと

天皇陛下のご譲位に平成の時代への感謝

先日、天皇陛下の譲位（退位）の御意思を受け、平成31年4月30日には天皇陛下のご譲位、5月1日に皇太子殿下が皇位継承されることが発表されました。明治、大正、昭和と、平成の時代、一番の違いは他国との戦争がない、その名の通り「平和の御代」であったことではないでしょうか。30年の間、様々な事を乗り越えて、こうして新しい世を迎えられることは国民として素直に喜びたいものです。

年が明けると譲位・即位の準備が始まります。平成30年は、平成の御代に感謝し、次代へ、日本の未来へとつなげていく節目の年。日本中にお祝いの気運が高まるかつてない機会です。

内宮に祀られている天照大御神は皇祖神（こうそしん）といわれ皇室の最初の祖先とされているのはご承知の通りです。天皇即位式の後、初めて行われる11月23日の新嘗祭（だいじょうさい）を「大嘗祭」として、皇居に設えられた御神殿にて一代に一度限りの儀式が行われます。その祭儀を終えて、数日後、「ご親謁（しんえつ）の儀」のために、天皇陛下として初めての神宮ご親拝（しんぱい）となることがこれまでの記録から伺えます。平成2年今上天皇ご親拝の際、伊勢のまちでお迎えしたことをご記憶されている方も多いのではないでしょうか。

瑞穂の国・日本の歴史と伊勢の神宮のお祭り

建国以来、万世一系の天皇が即位される他国に例のない歴史を持つ日本。神話として語られる時代から現代まで途絶える事なく国が続いています。皇室と神宮とのつながりは、ただ、皇祖神であるからということではありません。代々、天皇陛下はご自身で、宮中において祭典等を行い、神宮のお祭りと同じように神恩を感謝し、国の安寧、国民の幸福を祈ることを重要なおつとめとされています。

天孫降臨の神話では歴代天皇陛下に継承される「三種の神器」とともに天照大御神から「稲穂」が託されたとされています。米をつくる暮らしが、この国の繁栄と平和をもたらすとの教えからはじまり、お米を命の糧として国を建て、稲作を営み、神々を祀り豊作を願いました。毎年神嘗祭には陛下ご自身が皇居で作られた御初穂も神宮に奉献されます。そうして日本古来の文化、大切な心が伝承されてきました。二十年ごとに繰り返される式年遷宮も同様に千三百年の伝統をもつ神事です。

平成の最後の年に伊勢の民として感謝を

伊勢は、神領とされていた時代はもちろん、ご鎮座以来、神宮の歴史とともに歩んできたまち。この地に生きる人々は、日常的に、また遷宮行事などを通じ神宮から多くのことを学び、身近に感じさせていただいてきました。

神恩感謝の言葉通り、時代が変わろうとしている今、この伊勢だからこそ、平成に生きた民として感謝の心を表したいものです。

神話の時代から現代まで続く日本文化の伝承

伊勢に生きて、新しい御代（みよ）を迎えられる喜び
平成三十年は感謝の年に。

昔の一枚　伊勢の民俗行事　お木曳（きひき）

伊勢の伝統文化を伝える

500年以上の歴史がある伝統行事「お木曳」。神宮にご用材を運び入れる労役が、いつしか伊勢の町衆（まちしゅう）により町ごとが競い合うような、伊勢ならではの特別な民俗行事になりました。

川曳（明治時代の様子）

明治、大正時代のお木曳

昔、伊勢は神領といわれ、地元に住まう「神領民」はその役割として神宮へのご奉仕を行ってきました。中でも式年遷宮に伴うご用材の運搬作業、550年以上前から継続されている「お木曳」は、大変な労働でありながら崇敬の意をもって神領民の栄誉とされていました。昨今は1～3本の木を積むことが普通ですが、実質的な運搬を担っていた時代は、一度に何十本も積んで、その技術を競ったり、必要とあれば昼間だけでなく夜曳も行われたり、期間も長く何か月もかけて行われるなど、総出で労をいとわずという時代もあったといいます。とはいいながらも、江戸時代にはそれぞれの飾りや衣装など、町々の個性が発揮され、ずいぶん華やかなものになっていました。

そして明治時代には、ご遷宮は新政府国家が行うものとなり神宮独自の用材搬入が進められましたが、神領民が願い出て奉仕の民俗行事として継続して実施されるようになったという記録があります。当時はまだまだ労役奉仕の必要性は高く、大正時代の第58回お木曳は3次（春から夏の期間のみ3年間）に渡り、最大規模の奉仕となりました。

陸曳（大正時代の様子）

平成29年 神嘗奉祝祭（かんなめほうしゅくさい）、初穂曳（はつほびき） 報告（中面をご覧下さい）

第17回 神嘗奉祝祭「祭のまつり」報告

伊勢へ集い、みんなでお祝い。雨の中でも笑顔いっぱいの響演

神嘗祭をお祝いする伊勢のお祭り「神嘗奉祝祭」。日本各地の著名なお祭りが例年これだけ揃うのも「お伊勢さん」だからこそ。ご参加、ご協力いただきました方々に感謝申し上げます。

15日／全国各地からのお祭り踊り連がひとつになる神嘗奉祝祭ならではの「総踊り」（大通り会場）

十月十四日(土)・十五日(日)・十六日(月) 神嘗奉祝祭（かんなめほうしゅくさい）

神宮の神嘗祭をともに祝い、収穫の喜びと五穀豊穣の感謝を分かち合う神嘗奉祝祭。伊勢だけの行事ではなく「祭のまつり」として日本各地から著名なお祭りが伊勢に集い、神宮への感謝の想いを込めて、踊りや舞いなどを奉ります。各地で伝統芸能、文化を守り継ぐ18団体が来勢しました。

前夜祭は土曜日の夜ということもあり、サンアリーナ会場も大盛況、華やかな響演となりました。15日外宮前は、あいにくの小雨模様でしたが、観光の方をはじめ、多くの観客に足を運んでいただいており、演者の皆さんには無理のない範囲でご披露いただきました。

すべての演目が終了した後は、各団体揃って、それぞれ地元から携えてきた一握りのお米をもって外宮へ参拝し、ご奉納されました。

14日／サンアリーナでの前夜祭のようす

第46回 初穂曳（はつほびき）

伊勢の民俗行事を次世代につなぐ初穂曳。外宮・陸曳では、三台の奉曳車に初穂を積んで、子どもたち、大学生、伊勢の町の若い衆にも参加していただいています。

初穂曳（陸曳）

「お木曳」「お白石持」という、ご遷宮に関わる民俗行事を伝承し、また神嘗奉祝の主軸として行われている「初穂曳」。外宮領・陸曳は、神宮の奉曳車を使用し伊勢神宮奉仕会青年部が運営実務を行っています。

今年も三台の奉曳車には「お木」・「樽」・「米俵」が積まれ、お初穂が飾られました。車には雨よけのシート、そしてレインコート姿の曳き手となりましたが、一番車に子どもたちや皇學館大学生、二番車には伊勢の町衆、三番車には県内外の特別神領民など、約1500名が、エンヤーの掛け声で元気よく奉曳し、お初穂やお米を持って、外宮へ奉納しました。

16日の内宮領・川曳もあいにくの雨模様の寒い一日でしたが、今年は長峰連合奉献団が運行を担当、無事内宮へ奉納されました。

初穂曳（川曳）

Q 初穂曳（はつほびき）はいつからはじまったの？

4年後（2021年）には第50回を迎えます。

初穂の奉納行事はそれ以前からありましたが、伊勢市民が参加でき、大祭りの核となる行事に、という思いと民俗行事「お木曳行事」「お白石持行事」の伝統継承という意義を踏まえ昭和47年から行われています。以来、実施母体等の移行や、大祭りが土曜・日曜の開催になるなどの変動はありましたが、今年の第46回まで初穂曳は例年10月15日・16日に実施されてきました。

事前申込をすれば、伊勢市民はもちろん、市外の方も特別神領民として奉曳にご参加いただけます。

■子どもたちと共に米作りから奉納まで

伊勢神宮奉仕会青年部では初穂曳を次世代へつなげていくために、できる限り青年層が中心となって、奉曳の技術を研鑽しています。またその一環として、初穂曳で奉納するお米づくりも毎年行っています。

初穂曳に曳き手として出る子どもたちも、田植え、稲刈、奉納まで経験していただいています。収穫した稲穂を整え奉納する稲束をつくるなどの準備作業もすべて奉仕会青年部と、たくさんの地元協力団体が行っています。

田植え（4月29日）

稲刈り（8月27日）

奉納のための稲束作り

奉曳車に米俵など荷積み

お初穂を外宮へ奉納

※神宮奉仕会青年部の活動については事務局にお問い合わせください